

令和元年度
地域における青少年健全育成推進会議
第2回

令和2年2月3日（月）

都庁第一本庁北舎42階

「特別会議室A」

午後 1 時 30 分開会

○東京都生活文化局長 お待たせいたしました。少し電車で遅延が発生しているということで、まだ御到着されていない方もいらっしゃいますが、定時でございますので、始めさせていただきます。

ただいまから、令和元年度第 2 回「地域における青少年健全育成推進会議」を開催いたします。開会に先立ちまして、初めにお配りしております資料の確認と出席状況の報告を事務局からお願いいたします。

○担当課長 それでは、最初に配付資料の確認をさせていただきます。

まず一番上の会議次第、続きまして、この推進会議の設置要綱、そして会議の委員名簿、そして資料 1、第 1 回会議でいただいた主な御意見、資料 2、やさしい日本語と多文化共生の推進について、続いてチラシ、外国人のための防災訓練、もう一つのチラシが、コミュニケーション支援ボードです。資料 3、共生時代を担う子どもたちを育てるためにでございます。

過不足等がございましたら、挙手をお願いします。よろしいでしょうか。

続きまして、出席状況報告です。今、会長からもお話がありましたとおり、本日の出席者の方々につきましては、受付で配付しました座席表の裏面に名簿がございます。このうち、4 名ほど遅れて到着が見込まれていますけれども、後ほど御到着になるということで、よろしくお願いいたします。

事務局からは以上です。

○東京都生活文化局長 それでは、開会に当たりまして、初めに私から一言御挨拶を申し上げます。

本日はお忙しいところ、お集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。また平素より私どもの事業に関連いたしまして、それぞれの地域、さまざまなお立場で青少年の健全育成に御尽力をいただいております。この場をおかりいたしまして、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて、オリンピック・パラリンピックの開会まで半年を切りました。オリンピック開会まで 172 日、パラリンピックまで 204 日ということでございます。今後、この大会開催に向けて、外国人の方が大勢日本及び東京にいらっしゃると思います。また、都

内にお住まいの在住外国人も近年大変ふえてきております。新しい時代を担う青少年にとりましては、この東京 2020 大会は国際意識を醸成するまたとない機会であるとともに、多様な人々を受け入れる立場に立って、思いやりの心を育む大変貴重な機会になることと考えております。大会以降も青少年が多文化共生の心を育みながら健やかに成長していくためには、日本人も外国人も誰もが安心して暮らし、参加、活躍できる地域づくりが重要であると考えております。

一方で、第1回のこの会議の場でもございましたように、外国人の方が地域で孤立している、または教育現場で日本語がわからないために教員とのコミュニケーションが難しいなど、さまざまな御意見をいただいたところでございます。そこで今回は「青少年の多文化共生の心を育む～お互いを思いやる子どもたちを地域で育てるために～」を議題といたしまして、まずコミュニケーションツールの一つとして、やさしい日本語を御紹介申し上げるとともに、NPO法人青少年自立援助センターの田中宝紀様、この後間もなく御到着いただけると聞いておりますが、御講演をいただくこととなっております。

委員の皆様方とは、前回同様活発な意見交換をさせていただきまして、今後の東京都の取組に活かしてまいりたいと考えております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、本題に入る前に本日の会議の公開について申し上げます。東京都の附属機関の調査審議につきましては、原則として公開するということが附属機関等設置運営要綱に規定されております。本日の会議は公開とさせていただきます。また議事録につきましても、同様の扱いとなります。本会議終了後、委員の皆様方に改めて御確認をいただいた後、公開する予定でございますので、御了承ください。

それでは、次第にのっとりまして議事を進めさせていただきます。

初めに、相互理解のためのコミュニケーションツール「やさしい日本語」についてでございます。まずは事務局より御説明をお願いします。

○担当課長 はい、まず「やさしい日本語」の説明に入る前に、私から、第1回会議でいただいた主な御意見を、確認のため、御説明したいと思っております。資料1を御覧ください。着座にて説明させていただきます。

令和元年7月18日に開催されました第1回の当会議では、「青少年の多文化共生の心

を育む～日本人も外国人もともに活躍できる地域社会を目指して～」をテーマにし、多文化共生に関する都の取り組みの御紹介と意見交換をさせていただきました。意見交換の中では、皆様から貴重な御意見をいただきました。

一つ目が、在住外国人の地域コミュニティへの参加についてです。これにつきましては、地域の中で外国人が孤立している。ゴミ出しなどの日常的なルールが分からずトラブルになっているといった課題が挙げられました。

二つ目は、外国にルーツをもつ子供の保護者とのコミュニケーションについてです。これについては、外国にルーツをもつ子供、すなわち国籍を問わず、両親またはそのどちらかが外国出身である場合、子供の保護者が学校からの通知文の日本語が難しく、伝達事項が伝わらなかったり、また通知文などを相手の使用言語に合わせて翻訳をしている学校もあったり、教員の負担がふえているといった課題が挙げられました。

三つ目は、青少年健全育成事業への参画についてです。さまざまなイベントへの参加者をふやしたいという点につきましては、日本人についても同様の課題がありますけれども、地域の健全育成イベントに外国にルーツをもつ子供や保護者たちが、まだほとんど参加していないというような現状の課題が挙げられました。

これらから共通して言えることは、日本人と外国人、相互のさらなる意思疎通が大切だということです。それには国籍も使用言語も多様な在住外国人とのコミュニケーションツールの一つとして、これからお話をする「やさしい日本語」というものがございます。「やさしい日本語」は多様な在住外国人とのコミュニケーションツールとして最も有効だということが、後ほど説明するアンケート結果からも分かりました。

そして「やさしい日本語」を使って歩み寄ることで、日本人と外国人が互いに思いやりを持って多文化共生意識を醸成しようとするという効果も期待できると考えています。

さらに、このような「やさしい日本語」を普及させることは、相手の立場に立って、交流できる、思いやりのある子供たちを地域で育成していく、まさに青少年健全育成事業の狙いでもございます。そうしたことにもつながっていくと考えています。

皆様には、こうしたツールを今後の活動にも積極的に取り入れていただいで、広めていただけたら幸いです。

私からは以上です。

○東京都生活文化局長　それでは、実際「やさしい日本語」についての具体的な説明をお願いいたします。

○課長代理　生活文化局都民生活部の村田と申します。それでは、私から「やさしい日本語」についての説明をさせていただきます。

皆様のお手元にも資料2として資料をお配りしておりますが、画面でも随時資料を表示しておりますので、そちらも御覧ください。

そもそも「やさしい日本語」というのは何かということですが、これは外国人等にもわかるように配慮して、簡単にした日本語のことです。もともとは1995年の阪神・淡路大震災のときに、災害発生時に外国人にできるだけ早く正しい情報を伝えられるよう考え出されまして、東日本大震災のときに意義が再確認されました。

よく言われておりますのが、東日本大震災のときに津波が来るので、「高台に避難してください」という状況がありました。これがなかなか東北地方の外国人の方々に伝わらなかった。「高台」「避難」という言葉が難しかった。例えば、「高いところに逃げてください」と言えば、より多くの人へ伝わったのではないかということが言われております。

「やさしい日本語」を使う場面なんですけど、今申し上げたように、もともとは災害などの緊急時に使う言葉として広まり始めたものです。災害時には、外国人が情報弱者となる場合も多いと書かせていただきましたが、例えば阪神・淡路大震災のときに、被害を受けた割合ですが、日本人の方は1,000人当たり大体1.5人くらいの方が被災地で亡くなったと言われております。それに対して、外国人は1,000人当たり2.7人の方がお亡くなりになったと言われております。これが負傷者になりますと、大体1,000人当たり、日本人は8.9人くらい負傷したのが、外国人の場合は、1,000人当たり21人以上ということで、明らかに外国人のほうが被害を受けた割合が高いというデータがあります。これはやはり言語の問題が大きいだろうと言われており、やはりそういった外国人の方々に配慮した情報発信が必要ということが言えると思います。

それと、発信する行政の側も災害時などには、翻訳・通訳の余裕がなかなかないものですから、そうした場合にも「やさしい日本語」が有効ということで、まずは一種の防

災ツールとして普及が進んできております。

ただ、近年は、後ほどお話しますが、在住外国人、それから日本を訪れる来訪の外国人の方々も増加しており、外国人支援団体はもちろん、行政、それから民間部門のコミュニケーションや広報のツールとしても徐々に普及してきております。

その「やさしい日本語」普及の背景について、もう少しお話ししますと、外国人人口が、非常に増加しております。ちなみに、ここでいう外国人というのは、いわゆる外国籍を持っている方々のことを指しており、我々は外国にルーツのある人々という言い方もしますが、その場合は、例えば外国生まれで日本国籍を後から取得したり、そういった方々も含まれるので、こういうデータの外国人というのは、狭いほうでとっております。なので、広い意味でとると、もっとたくさんの方がいるということです。

都内の在住外国人の人口ですが、平成 27 年 1 月段階では 39 万人だったのが、令和元年 12 月、大体 5 年間の間に 57 万 8,000 人までふえております。16 万人くらい、この 5 年間でふえている。1 年間にやはり 3 万人以上ふえているということです。都内総人口が今 1,400 万弱ですので、大体その 4%。新宿区や豊島区といった外国人の方が多い自治体では既に 10%を超えております。このままの増加率でいきますと、単純計算ですが、2040 年には、125 万人くらいになります。そのころには都内の総人口というのは 2025 年以降、減少に転ずると言われておりますので、2040 年には、都内に住む人の 10 人に一人は外国籍の人々という未来が待っているのではないかとということが東京都の計画などにも載り始めております。

そうした方々の国籍も多様化しており、都内在住者の出身は今 194 の国・地域に及んでおります。かつては中国、韓国、それからアメリカが多かったんですが、近年非常にふえているのが、ベトナム、ネパールといった国々の方で、ベトナムやネパールというのは、いわゆる非英語話者、英語をしゃべったり、なかなか聞き取ることができないという方が特に多いような国の方がふえているという状況があります。

そうした在住外国人の方々の言葉に関する状況ですが、少し古い、全国調査になりますが、2009 年に国立国語研究所というところが生活のための言語の調査を行いまして、その結果、外国人のうち英語ができる人というのは 4 割台で、一方、簡単な日本語ということだと思いますが、日本語ができる人というのは、6 割を超えると。もっと最近の

地域を区切ったような調査ですと、この割合はさらに差が開いており、英語よりも日本語を解する人のほうが割合としてはずっと多いということが言われております。

一つ飛ばしまして、一番下にある在住外国人向け情報伝達に関するヒアリング調査というのを、おとしし東京都で行いましたが、そこで、在住の外国人の方々にヒアリングを行った結果、希望する情報発信の言語としては、英語よりも「やさしい日本語」を希望する方のほうが多いという結果が出ております。

また、よく言われるのが、日本人の場合とはとにかく外国人の方だと英語をしゃべらなくてはいけないという意識が強いものですから、町中で外国人の方に話しかけようとするとハローと言ってしまうんですが、少しでも日本語がわかったり、日本語を勉強しているような人たちからすると、逆に英語で話しかけられると、私は日本語を話したいのになということがよくあるというエピソードも最近聞かれることが多くなっております。こうした状況から、多くの外国人の方に情報を届けるには、「やさしい日本語」の活用が重要であろうと、我々は認識しております。

「やさしい日本語」のポイントですが、日本語特有の難しさというのはどういうものだろうと考えたときに、やはり漢字が難しいということが言われております。平仮名とか片仮名とか、文字の種類が多い、常用漢字だけで2,000文字くらいありまして、音よみ訓よみという読み方も変化したりします。また同音異義語が存在します。例えば、4という数字をあらわすだけでも、四本・四日・四季、それからあついという読み方だけでも、ここに書いてあるように、さまざまなあついがあります。それと、去年台風のときにも言われましたが、電車は今不通ですというアナウンスがあったとします。これは不通というのは我々は通らないと、通っていないという意味なので、電車が動いてないんだなというふうに思うわけですが、それをただ音として、まだ日本語能力が十分でない人が聞くと、普通に走っているというふうに受け取ったりします。なので、そういう部分で、難しさがある。

それと、日本語の場合に難しいと言われたのは、日本語だけではないんですが、擬音語、擬態語が多いという点です。お医者さんにかかったときが一番わかりやすいと思いますが、例えば、あなたはズキズキ痛みますかとか。もっと難しいと、シクシク痛みますかとか、チクチクしますかみたいなことを言うんですが、これは非常に表現としては、

難しい言葉です。なので、医療の診察の現場で言葉のコミュニケーションに困るという話はよくあります。それと敬語があつたり、方言があつたり、男言葉・女言葉があつたりする。これも難しいと言われております。

それと、日本語の場合、普通主語の後に「てにをは」というのがつくんですが、この「てにをは」が難しいと。半分冗談みたいな話ですが、ウナギ文、コンニャク文という話がありまして、例えばお昼御飯を食べに料理屋に入りました。メニューを見ながら、「僕はウナギ」「私はてんぷら」だけど、「僕はウナギ」というのは、直訳すると「I am an eel」なんですね。おまえはウナギかという、こういう話になるわけです。そういった「てにをは」の難しさがあります。

あとは同じような話で、コンニャク文ですが、「コンニャクは太らない」と。これはもっと砕いて言うと、コンニャクを食べても太らないという話なんですが、直訳的にそのまま意味を文字どおりとると、コンニャクそのものが太るのか、太らないのかみたいな話に受け取れてしまいます。

それと、少しこれは日本人からすると意外なんですが、日本語というのは、少し音節の問題など、いろいろあるようで、話すスピードが耳で聞くと速く感じられるのだそうです。これは英語圏や、欧米圏の人から見ても早く感じられるそうです。ですので、少しそういう難しさがあります。

では、日本語をやさしくするにはどういうふうにしたらいいかということです。最初のほうは日本語特有というよりも、これは文章一般だと思うんですが、まず必要な情報だけにして文章を短くする。文章がだらだら続くと、やはりそれを聞く場合でも読む場合でも難しくなる。一文で一つの情報提供に。よくたとえ話で言われるのが文章、特に日本語の場合は、何々で～、何々で～というふうにつなげることが多いです。そうしてつながっていく、だらだら長い、「そば」とか「うどん」みたいな文章になってしまうので、「やさしい日本語」というのは、後で例も出てきますが、一文で一つのメッセージ、だから、一つの食べ物に一つのネタを乗せる「握り寿司」みたいな感覚でしゃべってください。

あと、文の構造を簡単にといい、二重否定などは避ける。何々でないことはない、みたいな話をよく我々は言うんですが、これは難しいです。あとネガティブ表現が難しい

みたいな話もありまして、例えばごみ捨てるの話は外国人の方々にに関してよく出てくると思うんですが、ごみを分別しないで捨てないでくださいと。これは難しいですね、非常に。その場合は、ごみはちゃんと分けて出してくださいと。何々しないでくださいじゃなくて、何々してくださいという文章の方がずっと簡単ということが言われます。

それと漢字は難しいので、平仮名にする。難しい言葉はできるだけ避ける。尊敬語ではなくて、ですます調が基本です。これは日本語を学ぶ外国人の人にしてみると、日本語の教科書というのは基本的には丁寧体、ですます調で覚えます。なのでそれが基本です。肝心なのはメッセージを伝えることですので、写真やイラストなどを併用する。話す時は「はさみの法則」ということが言われておりまして、はっきり言う、さいごまで言う、みじかく言う。

幾つか言いかえの例を少し紹介したいと思います。両親というのは、少し熟語で難しいので、おとうさんとおかあさん。土足厳禁は、くつをぬいでください。無料、これは非常によく使う言葉ですが、これは、おかねはいりません。キャンセルという片仮名語はやはり日本語を勉強する人にとっては難しいんです。なので、やめる。処方箋は簡単な言葉に言いかえるのが難しいので、少し砕いてあげて、あなたのくすりのなまえがかいてあるかみ。召し上がりますか？というのは敬語で難しいので、食(た)べますか？。喫煙は御遠慮ください、これも非常によく使いますが、たばこはやめてください。敬語はやはり難しいので。

趣味は何ですか？と聞くときに、どうしたらいいかというと、これは一つの例ですが、なにがすきですか？スポーツ？おんがく？りょうり？。なので「やさしい日本語」というのは短くなるとは限らないんです。趣味は何ですか？を単に何が好きですかと変えてしまうと、好きというのは趣味の話だけではなくて食べ物かもしれないし、ほかのいろんなことかもしれない。なので、言葉を足してあげて、スポーツ？おんがく？りょうり？というのが、この例です。ただ、趣味を聞きたい場合に、必ずしもこの聞き方が唯一の正解ではなくて、例えば、休みの日には何をしますか？と。これでも趣味は聞けると思います。

御本人様確認ができる物をお持ちですか？、これは外国人の人と会話するわけですから、ざいりゅうカードやくるまのめんきょしょうがありますか？。劇場に行くと、無料

でコンサートが観られます、げきじょうでコンサートをみることができます、おかねはいりません。

少し例が続いて恐縮なのですが、例えばこのような文章を仮につくってみました。これは団地の自治会の役員会に出席をしてくださいという文章なのですが、こういう文章は珍しくないと思います。時候の挨拶が入って、いろいろ書いてあるんですが、ただ情報としては、これを「やさしい日本語」で伝えるとしたら、こんな感じでも大丈夫です。〇〇団地自治会からのお知らせです。何月何日に、役員会があります。役員の方は、何時に来てください。情報としてはここまでで十分なのですが、それだと日本人から見ると余りにもなんていうか、ぶしつけというか、ぶっきらぼうに聞こえるかもしれないので、最後によろしくおねがいします、とつけておくといいかなというふうに思います。

それと、先ほどの「そば」か「うどん」か、「寿司」かみたいなので、少し今書き言葉の例を続けたんですが、少しアナウンスの例を一つ紹介します。これは、1995年1月17日、先日25周年のいろんな催しがありましたが、阪神淡路大震災のときに、実際にNHKニュースで流れた言葉ですが、読みます。

気象庁では今後もしばらく余震が続くうえ、やや規模の大きな余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して十分注意してほしいと呼びかけています。これを一文で続けて聞くのは、非常に言葉の聞き取りとしては難しいんです。なので、これは弘前大学の先生がつくった例なのですが、こうやってみたらどうでしょうと。気象庁からお知らせがありました。余震があるかもしれません。また地震があるかもしれません。気をつけてください。地震で壊れた建物の近くに行かないでください。こういうふうに切って、メッセージを砕いて伝えると伝わりやすいということです。

こうした「やさしい日本語」の意義ですが、これまでも少し話が出てきたように、都内在住者の国籍が多様化する中で、多くの外国人の方々とコミュニケーションをとっていくために必要なツールだと我々は考えております。翻訳不要なために情報伝達も速いですし、あと難しい文章については、一旦「やさしい日本語」にすると翻訳をする方も翻訳しやすくなることも多いと言われております。

それと2番目の意義ですが、日本人と外国人が互いに思いやりを持ち、「やさしい日本

語」を使って歩み寄ることにより、多文化共生意識が醸成する。多文化共生意識が醸成するというと少し難しい言葉ですが、要は同じ日本の社会、地域に住んでいく者として、外国人の多くは日本語を勉強しようと、学ぼうと頑張っているわけです。ただ、それが時間がかかったり、日本語というのは難しいので、なかなかその場面、場面で十分でないことも多い、となると、そこで日本人の地域に先に住んでいる側も少し言葉を易しくすることで歩み寄り、お互いの歩みよりの考え方というふうに考えております。

我々は「やさしい日本語」について、やさしいというのは必ず平仮名で書くんですが、これは「易しい」に掛け言葉になっておりまして、easyであるとか、plainである、つまり簡単であるという意味の易しいと、ここで述べているように思いやりを持って、お互いに一緒に地域でともに暮らしましょうということで、caringという英語で言ったりしますが、優しいという言葉を掛けております。

それと、もう1点、これまで在住外国人の方を前提に話をしてきましたが、この「やさしい日本語」の考え方は、海外から訪日する外国人の方とか、あるいは外国人に限らず、子供であるとか、高齢者であるとか、障害者とのコミュニケーションにも有効、つまり日本語の能力に関して、少し言い方は難しいんですが、何らかの課題を抱えたような方々とのコミュニケーションに有効ということが言われております。

こうした意義からも、これからの社会に不可欠なものとして、社会全体で普及することが望まれると、我々は考えております。

幾つか事例を紹介しますが、例えば東京都の国際交流委員会という組織がありますが、その「外国人のための生活ガイド」という情報発信においては、行政手続やくらしの役立ち情報などを「やさしい日本語」で提供しております。

それと、我々生活文化局では、今年度から本格的に取り組んでおり、外国人のための防災訓練や、各種リーフレット類などに「やさしい日本語」の使用を拡大しております。それと、区市町村や、各種地域の連絡会議などにおいて、きょう私が行っているようなプレゼンテーションを実施したりしております。2020年以降も、例えば都内の実態調査を行ったり、あと普及のための何らかの、動画や、リーフレットなど、少し検討中なんですけど、そうしたものをつくっていったりして、さまざまな主体と連携しながら、「やさしい日本語」の活用に取り組んでいく方針でおります。

あと事例としては、今申し上げた中で外国人のための防災訓練というのがありました
が、皆様のお手元に黄色いコピーをお配りしていると思います。これは、先週、1月28
日に行った訓練の実際のチラシです。これは外国人のための防災訓練という事業になっ
ておりますので、外国人の方に参加を呼びかけるものです。なので、全体が「やさしい
日本語」化されています。

一つだけ例を言いますと、一番右上のお金はいりませんと緑色で書いてありますが、
これは普通のチラシでは無料と書いてあるところですが、これは外国人の方向けにお金
はいりませんと書いたところ。こういった形で「やさしい日本語」化を進めており
ます。

あと事例としては、これはテレビの例です。災害時のテレビテロップ。これは昨年
の新潟山形地震のときに、日本テレビで出たテロップで、津波の絵と「津波！にげろ！」
とシンプルなメッセージで、これは「やさしい日本語」の考え方に沿ったものです。

それと台風19号が来たときに、NHKニュースがSNSで外国人の皆さんへというこ
とで、平仮名の文章で台風の接近を知らせる情報発信をしました。これに対して、SNS
というのはコメントがつけられますので、少し日本人からすると違和感があるとか、
外国人だから英語でいいんじゃないかというようなコメントがついて、まだまだ「やさ
しい日本語」というのは世間に広まっていないのかなと、少し思った出来事でした。

あとは防災から始まった考え方なので、避難所ポスターの例ということで、そこに挙
げております。道路標識などにも取り入れられ始めておりまして、これも弘前の例で
すが、絵と振り仮名を振った文字が組み合わせられております。

それと都庁のお膝元になりますが、都営大江戸線、最近はやはりオリンピックを見越
してというのがあり、電車の駅ですとか、社内での表示の多言語化というのが進んで
おり、大抵の場合、日、英、中、韓と多言語表示があって、漢字まじりの日本語に加えて、
平仮名で駅名を表示するという例がふえております。これも「やさしい日本語」の例
です。

それと国のほうですが、国も「やさしい日本語」の考え方を取り入れ始めており、国
は外国人材受け入れ施策を進めておりますが、そのための一環としての外国人向けの生
活仕事ガイドブックというようなものを「やさしい日本語」に変えるというようなこと

を行っており、また、新聞報道等によれば、今年の夏くらいまでに国のほうで「やさしい日本語」に関するガイドラインをつくるという報道もありました。

行政の取り組みです。行政の進んでいる取り組みで、ここで東京都が紹介できれば本当はよかったです。実は我々東京都はまだ取り組み始めたところでした。関東地方で一番進んでいるのは、横浜市の取り組みです。横浜市は市の情報発信の指針で、英・中・韓に加えて「やさしい日本語」で必ず発信しますということを明確に定めており、職員向けにも研修を綿密に行っております。こうした取り組みも出てきているということです。

あと、これもメディアの例ですが、NHKがNEWS WEB EASYというのを持っており、これはホームページでニュースをやさしい日本語化して発信しているものですが、おもしろいのは、想定読者が外国人だけではなく、外国人と小中学生なんですね。それで少し難しい言葉にパソコンでカーソルを合わせると、小学生用の辞書の説明が表示されるということで、先ほど私、「やさしい日本語」は外国人だけの話じゃないと申し上げましたが、こういうところにも重なる部分が出てきているということです。

それとこれも皆様の手元にピンク色のカラーコピーをお配りしましたが、コミュニケーション支援ボードというのがあちこちで使われており、これは「やさしい日本語」には限らないんですが、外国人の方とコミュニケーションをとるのに指差しでコミュニケーションがとれるように、コピーをお渡ししたのは、愛知県の芸術劇場で使っている例ですが、その場面で使う典型的な場面を「やさしい日本語」英・中・韓、それからイラストということで、難しいことなしに、指差しでコミュニケーションがとれるというものです。

それと、最近、実はきょうもNHKのおはよう日本でも取り上げてられていましたが、多言語音声翻訳のポケトークという機械だったり、ボイストラというスマホで使えるアプリだったりというのが普及し始めており、言葉を吹き込むと、それをそのまま翻訳して音声で出してくれるというものですが、そういうものが普及しております。ただ、そういう多言語音声アプリ、まだまだ翻訳の精度というのが、なかなか上がっていない部分もありまして、どうなのかなということも言われております。

一方、これまで「やさしい日本語」の話をずっとしてきましたが、「やさしい日本語」

というのはあくまで「やさしい日本語」なので、そもそも日本語力ゼロの外国人には通じないというところがあり、では、そういった外国の方には多言語音声翻訳を使おう、でも多言語音声翻訳はなかなか変換精度がまだまだな部分もあるということで、それではどうしようかというのと、「やさしい日本語」と多言語音声翻訳を組み合わせたらどうだろうという考え方があるので、ここで紹介しております。

一つ例ですが、例えばこれはボイストラというソフトなんですが、こちらはセール対象外です、セールというのは日本語で言うと和製英語だと思いますが、安売りだという意味だと思います。こちらはセール対象外ですというのと、これは安売りの対象ではないですという意味ですが、それを例えば今のボイストラという翻訳アプリに入れると、少し間違った翻訳のされ方をされていて、間違った英語からさらに間違った日本語になって、これは売り切れですと出てしまいます。セール対象外と、売り切れだと大違いになる。それはもともと、これは安くなりませんというふうに入れると、これは安くなりませんと当然ながら出てくると。

先日、防災訓練をやったときに、おっと思ったのが、この同じボイストラに炊き出しという単語を入れたら、やはり翻訳できませんでした。炊き出しというのは災害時には日本ではよく使われる言葉だと思うんですが、炊き出しと入れたら、何かスープづくりという意味になってしまいました。Soup brewing みたいになってしまい、翻訳できなかった。セール対象外ですとか、炊き出しくらいなら、まだいいんですが、本当にしゃべれない話はいっぱいあって、それは音声翻訳アプリではなく、グーグル翻訳だったと思いますが、去年の秋の台風のときに、とある自治体が避難情報を発信するのに自動翻訳を使ったところ、川から逃げてくださいというのが、自動翻訳で川へ逃げてくださいと訳されてしまった例があり、幸い、それで死者は出ませんでした、まかり間違えと大変なことになってしまうということがあるので、こういう翻訳をどういう言葉で使っていくかというのは非常にクリティカルな問題だということだと思います。

少し時間がないので、速足でいきますが、あと地域の事例というのを紹介したいと思います。東京の中でも中野区というのが駅前に新しい大学の留学生向けのキャンパスや、国際寮ができたり、あと新宿あたりでの日本語学校で学んでいる方が中野に住むケースが多いということで、ここ数年で外国人人口が1.5倍くらいになると、非常に増加率の

高いところですが。ただ、中野というのは一方で古い町でもありますので、地域の住民の方々から増加する外国人の方と交流する機会がないかという声が挙がっており、地元にある明治大学のほうで一肌脱ぐ形で、昨年の秋に国際交流運動会というのが行われました。17カ国くらいの外国人の方と地域の人々100人くらいで参加して、綱引きですとか、玉転がしですとか、いわゆるべたな日本の運動会で楽しんだんですが、このようなプログラムも「やさしい日本語」になっております。

実は私もこれに参加したんですが、私が入ったグループは20人くらいの参加者で、ロシア、台湾、中国、ミャンマー、あとカンボジアだったか、あとモンゴル、いろんな国の方々がいらっしやって、「やさしい日本語」で会話するんですが、おもしろかったのが、地域の人も参加しているので、地域の家族連れが参加して、そうすると子供も入っているのですね。「やさしい日本語」の場合は一概にこのレベルとは言えないんですが、小学校3年生くらいに話すような日本語が一番通じるというような話もありますので、そうした子供たちに話す言葉と日本語を学びかけの外国人の方々に話す言葉というのが、かなり共通しているということが、その運動会を通じてわかっておもしろかったです。

それと同じような話で、名古屋市国際センターで、やさしい日本語すごろくというのをつくり、これは今まで御説明を差し上げてきたような「やさしい日本語」の考え方に子供の時代から親しんでいただきたいということで、外国にルーツのある男の子の目線で小学校にとって身近な場面というのをすごろくで体験できますということで、それを通じて外国にルーツのある子供に対する理解だとか、「やさしい日本語」に対する理解を深めるというものです。これを名古屋市の場合は小学校の高学年全員に配布しているという取り組みを行っているとのことでした。

事例はここまでにして、最後に「やさしい日本語」の注意点だけ少しお話します。まず「やさしい日本語」に一つの正解はないということです。いろいろ「やさしい日本語」の有効性というのは話してきましたんですが、こう言えば必ず伝わる、という決まった答えはないんです。なので「やさしい日本語」については、取り組んでいる民間業者もありますが、さっきの翻訳機みたいな難しい日本語を「やさしい日本語」に自動変換するというのは結構難しく、今AIを使って何か取り組んでいる民間事業者もありますが、ま

だ実用化には至っていない。

例えば、中国の人には平仮名より漢字の方が通じる場合もある。それから、では全部平仮名化すればいいかという、今度は日本人にとって読みづらくなるんですね。我々は漢字と仮名まじり文で意味をつかむのになれているので、全部平仮名だとかえって読みづらかったりするといったことがあって、こう言えば絶対いいんだと、自動変換みたいな考え方には今のところなじまない。

それと、言葉だけで全てを伝えるのではなくて、視覚や聴覚への働きかけなどさまざまな手段と組み合わせることが重要です。例えば最初に高台に避難してくださいが通じなかったら、高い所へ逃げてくださいというお話をしたと思いますが、それでは高いところに逃げてくださいと言って通じなかったらどうするか。その場合は高いところを指差して、逃げろと叫んだり、その人の手を取って走って誘導してあげたりといったことをしなくてははいけない。つまり身ぶり手ぶりも含めて、メッセージを伝えるということが大事なので、あまり言葉の問題でこねくり回させてもしょうがないのかなというところがあります。

それと、全ての場面で「やさしい日本語」を使うべきではないということです。「やさしい日本語」というのは、やはり使う語彙を絞り込み、文章を短くするので、情報量というのはどうしても限定されます。ですので、高度専門的な内容ですとか、あと日本語の高度なニュアンスを伝えたい場合には、あと災害時などにはやはり母国語のほうが心理的に安心できるというのもありますので、そういった場合は母国語等への通訳・翻訳が必要になってきます。

よくこの話のときに私が例で言うのが、大リーグで活躍したイチロー選手はアメリカにいるときに、試合後のインタビューで、イチローさんくらいになると英語で日常会話はできるんですが、試合後のインタビューでは必ず通訳の人をつけたんです。それは、彼のプロフェッショナルなりのこだわりで、自分が専門的な内容を伝えるには自分の英語力では足りないと。だから必ずプロの通訳の人を通じて微妙なニュアンスを伝えると。そういうジャンルもあるので、「やさしい日本語」を使ったほうがいいのか、通訳を、翻訳を使ったほうがいいのかというのは、もちろん使い分けの話で、両方必要ということですね。時と場合と相手による使い分け、何が「やさしい」のかを考えてコミュニケ

ーションをとることが重要です。

最後まとめです。「やさしい日本語」は、これまでお話ししてきたように、外国人や子供、高齢者、障害者を含む多様な方々が共生するこれからの社会において、あらゆる分野において取り組むべき課題です。生活であったり、文化であったり、観光であったり、商業であったり、福祉・医療、教育、防災。特に医療や教育の部分は重要性が、緊急性が高いだけに、これから「やさしい日本語」をどう使っていくかというのが問われてくると思います。我々としては、これを多文化共生社会における一つの共通言語と位置づけて、推進を図っていききたいということで、まとめとしては、やさしい日本語を使って、東京を全ての人々にとってやさしい都市にしていくというのが、我々東京都の目標になっております。

私からの「やさしい日本語」についての説明は以上です。

○東京都生活文化局長 ありがとうございます。お配りしてある資料の最後に今の関係で「やさしい日本語」と多文化共生の推進の参考のサイトのURLも御紹介してありますので、あわせて御参照いただければと思います。

何か御質問がございましたら。いかがでしょうか。

よろしければ、最後にまた意見交換の時間をとりたいと思います。

続きまして、「共生時代を担う子供たちを育てるために—私たちに今、求められていること—」という題で、NPO法人青少年自立援助センター定住外国人支援事業部事業責任者の田中宝紀様にお越しいただいておりますので、御講演をお願いしたいと思います。

田中様はフィリピンの子供支援NGOの御経験を経て、現在の活動をしていらっしゃいます。外国にルーツをもつ子供たちの日本語教育を支援するYSCグローバルスクールを運営されているほか、日本語や文化の壁、いじめ、貧困など、子供や若者が直面する課題について積極的に取り組んでいらっしゃり、御発信もされています。

それではよろしく願いいたします。

○田中氏 ただいま御紹介いただきましたNPO法人青少年自立援助センターの田中です。本日はどうぞよろしく申し上げます。

皆様のお手元にお配りしている資料がありますが、そちらに含まれていないものも投影用のスライドに入っていますので、ぜひスライドとお手元の資料、両方行き来しながら

ら、お話を聞いていただければと思います。

今御紹介いただきましたとおり、16歳でフィリピンのハイスクールに留学をしたこともありまして、フィリピンの子供支援N G Oを運営している最中に、フィリピンルーツの女の子が日本の中学校で日本語もわからず、友達もできず、家では日本人の親戚にいびられ、というような状況に置かれた、そういったお子さんと出会ったことをきっかけに、今の仕事につくことになりました。

2010年度からN P O法人青少年自立援助センターで現職として活動をしていまして、今は海外にルーツを持つ子供、若者が置かれた課題や、外国人保護者の方々が困っていることなどをYahoo!ニュースや、W E Bメディア、S N S等を通じて、広く一般の方々にお伝えするというようなことも仕事として携わらせていただいています。

活動拠点は福生市と今足立区にありまして、やはり横田基地を用していることから、福生市は外国人人口比率が6.4%程度と、やはりかなり、いわゆる集住している状態にあるというところで、もともと法人の拠点も福生市であったことから、そちらでずっと活動をしていいますが、大体これまでに23区外の全ての市町村から、多分檜原村を除く全ての、市、町から受け入れの実績があります。いろんなところに住んでいる子供たちが福生市にある私たちのスクールに学びにやってくるという状況です。中には埼玉の西部ですとか、神奈川の西部ですとか、千葉の柏あたりからずっと電車を乗り継いで私たちの教室に通いに来て、日本語を学んだりという子たちもいて、そのくらい支援機会がないという状況が、ずっと私がこの活動に携わって以降、10年間、少なくとも続いているというところではあります。

もともとは当法人はニートやひきこもりといった若年無業者の方々への自立就労支援というのを柱に運営をされている団体でして、そこの一番新しい事業部ということで2010年に定住外国人支援事業部が教育支援事業Y S Cグローバル・スクールというのを立ち上げて活動をしている一方で、海外にルーツを持つ子供たちの中で、高校を中退してしまったり、あるいは進路未決定で卒業後、なかなか定職につくことができないというような、海外にルーツをもつニート状態にある若者たちとの出会いもふえてきまして、もともと自立就労支援事業が本分であることから、2013年からは法人内の若年無業者支援の事業部と連携をして、海外ルーツの若者の自立就労支援などにも取り組んでいます。

いつもいろんなところでお話をさせていただく中で、幾つか皆さんに少し感覚的にダイバーシティというものをつかんでいただけたらと思っており、これは皆さんにクイズとして御用意をしたスライドです。ここにいる子供たちは全員私たちがサポートしてきた海外ルーツの子供たちなのですが、彼らにある共通点があります。この6人に共通する点とは何でしょうか。

これは、当てたらどなたかお答えいただけるような雰囲気の間なんですかね。もしよろしければ、こんな感じじゃないというような、想像で結構です。

ありがとうございます。大和田様。

○大和田委員 イスラムの方じゃないですか。

○田中氏 イスラムの方。ありがとうございます。イスラムの方は2名だけです。あとはクリスチャンのお子さんなんかも含まれています。

ほかに何か、ありがとうございます、どうぞ。

○浅野委員 笑顔。

○田中氏 笑顔、素晴らしいですね。本当にそうなんです。とってもみんなかわいくて、毎日本当に子供たちと触れ合っているだけで、本当にこちらも笑顔と元気をもらえるというような子たちなんです。実はこの6名は全員日本国籍を有する日本人なんです。いろんな宗教、バックグラウンドの子たちもいっぱい含まれていて、日本生まれ、日本育ちの子もいれば、ついこの間まで海外に行っていたというようなお子さんもいますが、全員が日本国籍を持っている日本人です。

続いて、このような子もいます。日本人男性とフィリピン人女性との間に生まれて、生まれてからずっとフィリピンで過ごしてきたAさんという日本国籍の女性です。2017年に彼女と出会ったときは日本語が全く話せなかったんです。ジャスティンビーバーが大好きで、めでたく都立高校に私たちの支援を受けて進学をして、今は立派なという大変ですが、高校生生活を、非常に充実した生活を送っています。

一方でこんなお子さんもいます。Bくんという、バングラデシュ国籍の男の子で、バングラデシュ人男性とブラジル人女性が日本で出会って、その間に生まれたお子さんで、生後13年間日本で育っています。家庭内言語は、お父さんとお母さんの共通語が日本語なので、Bくんも含めて全員が日本語でコミュニケーションをとっています。なので

彼の母語も日本語ということになりますし、日本語以外は話すことはできません。趣味はあやとりと折り紙で、冬場は編み物なんかもこれに加わりまして、非常にユニークなお子さんです。

続いて田中宝紀さん 40 歳、日本国籍の女性です。ハーフコリアンの父と朝鮮籍の母との間に生まれています。日本で生まれて日本で育って、もう 15 歳くらいまで自分のルーツを知らずに成長したので、完全にアイデンティティとしては日本人なんですが、16 歳で初めてフィリピンに行って以降、フィリピンと日本とを 100 回以上往復をしていると思います。日本語母語話者ですが、第 2 言語はビサヤ語というフィリピンのセブ島周辺で話されている民族語で、第 3 言語が英語で、第 4 言語はフィリピン語になります。

このクイズを通して何を言いたかったかというと、日本人が非常に多様化していて、皆さんも重々承知のとおり、大坂なおみさんですとか、八村塁さんですとか、そういった方々を含め、見た目やルーツ、あるいははらしさみたいなもの、私たちがこれまで、多くの方が日本人らしいと思っている部分というのは、少し時代にそぐわなくなってくる、あるいは、そこに当てはめられることで、非常に苦しい思いをする人々もふえてきているという時代に入ってきているのかなというふうに思っています。

先ほどから海外にルーツを持つ子供というふうに呼んできましたけれども、この会議の中で恐らく外国にルーツを持つ子供というふうに呼ばれているのではないかと思います。外国籍のお子さんだけでなく、いわゆるハーフ、ダブル、ミックスルーツというような日本国籍を持つお子さん、あるいは難民 2 世、あるいは親御さんが非正規滞在中に日本国内で生まれたお子さんなど、無国籍、無戸籍状態のお子さんも含めて、国籍にかかわらず両親またはそのどちらか一方が外国出身者である子供くらいの定義になっています。ただ、定義がきちんと定められているわけではないんですが、大体支援者の方々同士で、このくらいの定義を共有しているのかなというふうに思っています。

一方で、結構いろんな呼ばれ方をしてまして、外国にルーツを持つ子供のほかにも、外国つながりの子ですとか、外国由来の子供という表現をする人もいますし、大阪周辺だと、渡る日本と書いて渡日児童生徒、あるいはニューカマーのお子さんのことを指して新渡日の子供たちということがありますし、移動する子供ですとか、CLD 児なんていう表現もあります。これはアカデミックの方々がよく使ったりしていますが、

Culturally Linguistically Diverse Children という、文化的言語的に多様な背景を持つ子供や、あるいは日本語の状態をあらわして日本語を母語としない子供、J S L 児童生徒等、本当にいろんな人がいろんな呼び方をしているんです。この呼び方がしっかり定まっていないということ自体が、海外にルーツを持つ子供たちが日本社会の中でどれだけ不安定の存在であるかということの端的にあらわしているなというふうに思っています。なので、できれば、何らかのタイミングで国もそうですが、呼び方をきちんと統一して、しっかり社会的に位置づけられた存在として対応をしていけるようになるというふうなふうに思っています。

こんな海外ルーツの子供たちを年間 120 名くらい、これまでおよそ 800 名近くの子供、若者を YSC Global School という現場で支えてきました。もう子供、若者なので、6 歳から 30 代くらいまでを含みます。最も多いのが 14 歳から 18 歳くらいのティーンエイジャーたちがボリュームゾーンです。ついこの間日本に来たばかりという新規来日の日本語が全くできないというお子さんから、日本で生まれ育って B くんのように日本語しかできないけれど、学校の勉強についていくことが難しいというようなお子さんまで、多様な人数が集まってくる現場です。フィリピン、中国、ペルーあたりが多いんですが、加えて 2013 年くらいからネパールルーツのお子さん、やはり東京なので、ほかの地域と比べても非常に会おうお子さんの国籍の数が多い、多様性が高い現場になっています。最近はなぜか福生のほうではアフリカルーツのお子さんがふえていて、少し年度によってトレンドが変わってきますが、常時 10 カ国以上の子供たちが在籍をしています。

年間 120 名くらいをサポートする中で、約 2、3 割の子供たちがいわゆる困窮低所得世帯、外国人ひとり親世帯に暮らしています。かなり厳しい経済状況の御家庭のお子さんも多くて、私たち自体は教育支援の現場なので、生活支援は直接的には行いませんが、必要に応じてケースワーカーさんや、子ども家庭支援センターさん、行政の皆さんと連携をして、複合的な課題を抱えやすい子供たちに対してサポートを提供しています。

どちらかという、本当に今は学校のような役割を果たしている部分が多く、日本語学校に高校進学予備校にフリースクールに塾を合わせたような形で、週 5 日朝 9 時台から夜 7 時台まで延々と入れかわり立ちかわり、子供たちが学びにやってくるというような現場になっています。日々はこんな感じで、集団授業を中心に、不登校、不就学状態

のお子さんたちも少なくないので、学校替わりとして社会体験活動ですとか、日本の生活を少し知ろうということで、子供たちとキャラ弁づくりにいそしんだりですとか、子供たちが大学に進学をしてくれたらいいなというような思いも含めて、東京外語大学様と連携をさせていただいて、キャンパスツアーをしたりですとか、いろいろな取り組みを行っています。

ものすごく、こうした場で課題に上るくらいなので、皆さん現場で海外ルーツの子供たちの存在を身近で感じておられるんだろうと思います。今全国的な傾向として、やはり特に日本語の力が十分でない子供たちが教育の場にふえてきたということで、その対応が急がれるところです。文部科学省が2年に1回日本語指導が必要な児童・生徒の数を調査しまして、公表をしております。これは公立の小学校、中学校、高校、中等教育学校、特別支援学校に在籍をしている日本語がわからないと認知をされた子供の数です。ですが日本語がわからない状態をどうやって認知するかというのは、実はまだ基本的な指針がなく、ばらばらですが、いずれにせよ、現場の先生方が、この子は日本がわからないから指導が必要だというふうに数えたという数になっています。

手前の青いバーが日本国籍をもつ日本語指導が必要な子供、奥の紫色のバーが外国籍の日本語指導が必要な子供で、2018年の調査報告で、これが最新になりますが、5万1,126人にのぼっています。2014年あたりからぐぐっと伸びているのがわかります。この10年くらいで約1.5から1.6倍くらいに増加をされていて、対応する学校の先生方、悲鳴に近いようなSOSが私たちの現場にも届きます。特に日本語指導が必要な児童・生徒数が多い自治体としては、愛知県、神奈川県、東京都というふうに続いていきますが、これは愛知県さんはもちろん、もともと日系人の方々の受け入れが多いということもありますが、どの状態までを日本語指導が必要であるかというところの定義によって、若干この数字にばらつきが出るところです。ある自治体では、例えばこうした子供たちに対応する時間を年間約20時間というふうに定めます。一人当たり。その20時間の支援時間が終了した段階で、日本語指導は必要ないというふうに、より分けられてしまうような実態もあります。なので、ここに数えられている数というのは、あくまでも氷山の一角というふうに捉えていただければなと思います。

さらに日本語指導が必要な子供たちは、特に愛知県や静岡県など、日系人の方々が多

い地域を中心に対応がなされてきたので、子供たちの母語を見てみると、ポルトガル語あたりが多いです。これまでずっと、割とポルトガル語、スペイン語、日系人の子供たちの言語に対する対応というのが多かったんですが、最近では日本語指導が必要な子供の多様化も進んでおり、東京都は特にもとからそうですが、フィリピン語ですとか、中国語ですとか、ベトナム語なんかも児童・生徒の母語としてはふえてきている。多言語化が進んでいるということは、多国籍化が当然進んでいて、さらに多宗教化が進んでいて、多文化化も進んでいるということで、かなりいろんな側面で多様性に対応していかななくてはならないような状況が差し迫っているというところですよ。

こうした子供たちに一生懸命国ですとか、各自治体なんかも対応しようとしているところではありますが、圧倒的に支援機会が不足しています。なので YSC Global School のような場所に2時間以上もかけて足を運ぼうとする子供たちが減らないという状況になっています。

十分な支援機会がないと、皆さん直感的におわかりいただけると思うんですが、言葉がわからない中、学校に通うというのは非常に苦痛を伴うんです。もちろん友達や先生とのコミュニケーションがうまくいかないとか。あるいは学校文書が理解できなくて、親御さんも含めて適切な情報へのアクセスができない。あるいは進学情報なんかがきちんと手に入らないので、高校進学率が伸び悩んでしまったりですとか、高校中途退学率なんかもかなり高どまりをしており、自立したキャリアが描きづらいというような問題もあります。こうした十分な支援機会がないという結果、不登校や非行状態ですね。結構やはり夜の町に絡めとられてしまうような子供たちも残念ながら少なくないです。現場レベルで見てもかなり多いという印象です。不安定就労で、紹介を介してインフォーマルな形態の就業構造にはまっていってしまうような若者たちもいれば、言葉の壁が乗り越えられず日本語も母語もできないというような状態に陥ってしまう子供たちもいます。地域の中で偏見や誤解にさらされるような外国人保護者の方々も少なくないです。

こうした十分な支援機会がないというのは、どのくらい十分でないかというのは、なかなかつかみづらいところなんですけど、例えば先ほどの文部科学省の日本語指導が必要な児童・生徒の調査によりますと、5万1,000人の日本語指導が必要な児童・生徒のうち、学校で何の支援も受けていないということが確認されているお子さんは約1万人で

す。日本語指導をする人材がいない、指導のノウハウがわからないですとか、在籍学級での指導で何とか対応しているというような状況で、特別な支援は行っていないというデータになっています。

これは毎日新聞さんが都道府県別に日本語指導が必要にもかかわらず、無支援となっている、学校で何の支援も受けていないというようなお子さんの割合を調べて掲載をしたものです。一番無支援のお子さんの割合が低いのが山梨県です。日本語教育が必要な児童・生徒が 341 人いる中で、何の支援も受けられていないという状態のお子さんは、わずか 6 名、無支援状態の比率が 1.8%になります。一方で全国で最も無支援状態の割合が高いのが長崎県で、61.2%です。ただ、日本語教育が必要な児童・生徒が県全体で 49 人に対して、日本語教育が必要な児童・生徒が在籍している学校数は 31 校なんです。49 人が小学校から高校までを含めて、段階別、学校別に 31 校に散らばっているという中では、なかなかやはりまとまった対応ができない。これは東京の西側、西多摩地域でも同じように外国人人口比率が少ないがゆえに、集中的な予算や資源の投下が難しいというような状況が起きており、外国人散在地域、散らばって存在している地域の課題というふうに言えます。

では、私たち東京都の中では何%くらいの子供が公立学校の中で無支援状態にあると思いますか。ちなみに神奈川県が 20.2%です。愛知県が 14.5%。大阪府は 25.4%になっています。どのくらいだと思いますか。このデータの出典は文部科学省です。

東京都は 28.1%です。大都市圏だと、どうしても数が多過ぎて体制整備が追いつかないということで、以前大阪の方ともお話ししましたが、これまで十分な支援体制をとってきたにもかかわらず、どんどん子供がふえる中で、全く追いつかなくなってきたというような状況が外国人の多い都市部で起き始めています。

このような感じで支援の空白が、かなり外国人が少ない地域にとっても多い地域にとっても厳しくなってきているという状況です。

この支援の空白地帯があると、どういうふうなことが起きるかというのを、少し事例から御紹介します。これは日本語がわかるようになってから学校に来てくださいという対応が実は自治体さんで結構メジャーに行われています。このお子さんは 10 歳で来日したインドネシアルーツの男の子なんですけど、お父さんは日本語ができて、お母さんは

全く話せないという。教育委員会の窓口で子供の就学手続をしようとしたところ、教育委員会の担当者はまず学校に確認しますと。学校は支援の仕組みが全くありません。日本語がわからないまま学校に来て、学校で放置になってしまったら、そのお子さんがかわいそうなので、今の時点では受け入れられませんと。教育委員会の担当者の方は学校は日本語ができないと受け入れできないと言っています。日本語をどこかで勉強してから、もう一度来てください。これは都内でも起きていますし、特に外国人が少ない地域の行政では比較的メジャーな対応で、これが万が一、地域の中にほかに支援をしているような団体がなければ、もしかしたらこのお子さんは就学を諦めてしまうかもしれない。日本語がわかるようになってから学校に来てくださいと言われた時点で、追い返されているんですが、就学手続させてもらえていません。これで不就学1名です。

これは、メディアでも大分取り上げられていましたが、日本全国の義務教育年齢のお子さんで、外国籍のお子さんのうち、不就学の可能性があるお子さんというのは約2万人いるということが報道で発表されています。これは、かなりの数です。東京は大分多かったです。こうした受け皿がしっかり整っていないということと同時に、所在確認をするというところが、まだルーティンとして行政機能に組み込まれていないというところなんです。なぜかというと、外国籍のお子さんの教育は義務教育の対象外なんです。このため、権利が認められているので、希望があれば入れますよなんですけど、権利だけ認めていても、やはり先ほどのインドネシアルーツのお子さんのように受け皿が整っていないから来ないでくださいとか。あるいは、就学通知をきちんと、「やさしい日本語」や翻訳文で出しているような自治体もあるんですが、ぺらっと日本人向けの漢字まじりの就学通知が来ても、なんだこりゃというふうになってしまいます。就学の手続までたどり着けないというようなこともあって、なかなかスムーズな教育機会の保証まで至っていないというところなんです。

ただ、一方で、多様化が進む中で、お子さんと親御さんの国籍にねじれがあるというケースもかなり出てきています。親が日本国籍、お子さんが日本国籍のときには就学義務があって、その逆のときには就学義務がないんですが、親が外国籍で子供が日本国籍というケースは結構あります。例えばフィリピン出身のシングルマザーが育てる日本国籍の子供というのは、皆さんの身近にも多いんじゃないかと思います。逆にお子さんが

外国籍で親御さんが日本国籍というようなケースもあって、こうしたケースというのは余り想定されていませんが、こういった部分も含めてしっかり就学機会を確保していくというような視点が、これから重要になってくると思っています。

今全国的に見て、文部科学省も政策を推進しようとしていく中で、恐らく公立学校の中での施策というのは拡充されていく傾向にあります。学校の先生方がしっかり対応できるようになる、あるいはポケットクのようなものを使って、外国人保護者等とのコミュニケーションを円滑にできるようにしていく。あるいは日本語指導が必要な子供に対する教員配置の定数を改善していく等々で、少しずつ環境は学校の中では改善されていく見込みです。ただし、今の段階で既に不就学の可能性があるお子さんがいたりですとか、きちんと把握されていないですが、不登校出現率も大分高いというふうに言われていますし、実は高校進学率も推計で7～80%くらいにとどまるんじゃないかと言われています。では、残り進学しなかった2、3割の子供たちはどこに行くのか。誰も把握していないんです。さらに高校に頑張って入っても、文科省の調査ですと、日本語が十分でないお子さんについては、中退率が9.6%、これは日本語に課題のないお子さんの約7倍に上るという結果が出ています。もちろん高校を頑張って卒業しても、進路未決定率が高かったりですとか、非正規雇用につながる割合が高かったりですとか、学校の、いわゆる学校教育のルールから外れやすい存在であるというふうに言えます。

そこを、これまでボランティアですとか、NPOですとか、東京都においては夜間中学、非常に充実していますので、重要な受け皿にはなってきたものの、やはりボランティアの方々による支援体制では十分ではない。あるいは、特に若者支援の分野ではまだ外国にルーツを持つ若者に対応できるような団体が少ないということもありまして、支援が手薄であって、就労支援ですとか、学び直しといったような、一般の日本人の若者であればセーフティネットとして機能して活用できるような施策がなかなかアクセスが開かれていないという部分もあります。学校の外側の資源やセーフティネットが非常に弱くて網の目がまだまだ大きいというところで、この網の目を学校の外側からやはり細かくしていくような取り組みというのが必要だなというふうに強く感じています。

さらに、ここまで言葉の壁を中心に課題を見ていきましたが、結構言葉ができるにも

かかわらず課題を抱えるというような子供たちも現場でよく出会います。ここに乘せたCちゃんという女の子、日系ペルーのお子さんなのですが、小学校6年生のときに来日して以来、すごく頑張って日本語を勉強しました。この子は、独学で日本語を勉強してきて、今高校2年生なのですが、中学校3年生で私が出会ったときは本当にネイティブかと思うくらいぺらぺらだったんです。読み書きもかなりしっかり、レベルの高い国語教育についていくことができるくらいの能力を持っていたんですが、そこに書いてありますとおり、Cちゃんは学校で一言もしゃべらないんです。でも私たちの支援の場にやってくるとマシンガントークでばっとしゃべる。なんでと聞いたら、間違えるとばかにされるんですよねと言うんです。おまえ日本語そんなのもわからないのかよ、ばかじゃないのかみたいなことを言われた経験が積み重なって、日本語を話すことが怖くなってしまった。なので、学校ではほぼしゃべらない。そのしゃべらないストレスを、もともとおしゃべりな子なので、ためて、私たちの現場にやってくるまで延々としゃべり続けるというようなお子さんです。先生に言ってみたらというふうに言ったんですが、先生に言っても意味ないじゃんということで、学校に対してなかなか前向きな気持ちになれなかったというお子さんです。とにかく外人だからしょうがないよと、頑張るしかないよというような諦めを抱えた状態で会いましたが、今は大分高校生活に前向きに送ってくれていると思います。

こういうCちゃんのような子供はとても多いんです。しゃべれるにもかかわらず、見た目が日本人らしくないということで、肌の色が汚いと言われてたりですとか、日本で生まれ育ったにもかかわらず、帰れと言われてたりですとか、そういったいじめを経験するお子さんが非常に多いです。さらに偏見がかなり多くて、いわゆるハーフのイメージもネガティブなものやポジティブなものに極端に振れ過ぎていて、ハーフ、金髪、青い目、英語ペラペラで格好いいみたいな。逆のよすぎるポジティブなイメージが非常に子供たちにとっては負担になって、ハーフなのに格好がよくない、ハーフなのに英語がしゃべれないというような部分で、コンプレックスを抱え込まざるを得ないような環境にあるお子さんも少なくありません。

あとは親御さんが外国人だというだけで、おまえの母ちゃん外人というふうにいじられたりということもあります。子供たちがさらされる学校で過ごす日々というのは、一

般的なイメージと自分自身の本当の中身とのギャップが非常に大きくて、そこに苦しむ子供たちが本当に多いんです。最悪の結果、みずから命を絶たざるを得なかったお子さんもいらっしゃいます。私の周りには直接はいませんが、海外にルーツを持つタレントさんなんかがよく友達が同じ海外ルーツの子だったんだけど、自殺をしてしまって、その経験からやはり自分は伝えていかなくてはいけないなというふうに思って、今いろんなところで発信をしているんですというような発言があったりもします。

こうした海外ルーツの子供たちを取り巻く環境というのは、本当に言語や文化の違いだけではなく、偏見、いじめ、差別、加えてドメスティックバイオレンスですとか、発達上の課題を抱えやすかったり、あるいは非行や犯罪、先ほども少し出ましたが、インフォーマルな就労につかざるを得ない状況の中で不安定な雇用環境や低所得につながりやすいというような学校の外側、教育の外側での課題も非常に多くを抱えています。

一方で先ほど「やさしい日本語」の御発表のときにもありましたが、海外にルーツを持つ方々は、ふえていきます。特に東京は、これは全国のデータですが、東京は非常にその割合が高い。全国的に見ても 2060 年には海外にルーツを持つ方、帰化した方等を含めて、1,000 万人以上、12% 近くになる見込み。もうこれは立派な移民社会と言って遜色のない割合です。やはり新しい時代に移っていく中で、新しい時代に必要な力というのを、今を生きる子供たちに身に着けていってほしいなということを思っています。

その力って何だろうということを、ずっと私も実践を通して考えているんですが、多様性に対する感受性なのかなというふうに一つ思う部分があります。これは、海外ルーツの子供だけでなく、日本人の受け入れ側のマジョリティの子供たちにこそ、育んであげたい力だなというふうに思うところです。せっかく多様性が高まっていく中で、それを否定しながら、そうした価値観を保持しながら生きていくことというのは、恐らく 30 年後非常にお子さんにとってメリットよりもデメリットが大きいような部分をもたらす社会が恐らくやってくる。そうした社会に生きる子供たちが、身に着けるべき力として、今育んでいく必要があるなというふうに思うんです。ただ、端的に共生社会に生きる力といっても、どんな力だと思いますか。多言語力とか異文化理解力とか、恐らく「やさしい日本語」を使える力ですとか、ポケトークをうまく使いこなす力ですとか。そういったテクニカルな部分はもちろん今まで必要ななかったスキルを身に着けておく必要

というのはあるとは思いますが、もっと全般的に必要な感覚的な部分というのは……。

ありがとうございます。どうぞ。

○大和田委員 想像力だと思っています。

○田中氏 ありがとうございます。そうですね。他者の苦しみや置かれた立場を想像する力というのが、本当におっしゃるとおり鍵になってくる部分だなと思います。それをどうやって身に着けるかというのが、結構難しいんですが、まず初めに今ヨーロッパ等での移民受け入れ国でダイバーシティ教育というものが推進をされています。お隣韓国も今移民政策に転換をしましたが、社会統合教育と呼んでいます。学校の中でマジョリティの韓国人のお子さんに対する社会統合教育というのをやっていると同っています。

例えば、そういった学校での教育に加えて、身近なところにダイバーシティのエッセンスを取り込むということが有効だと考えます。車椅子のバービーの写真があります。これは日本のトイラザラスにも登場しているんですが、車椅子に乗ったバービーだけではなく、ちょっとぽっちゃりしたバービー、もちろん肌の色が違うバービー、あるいは設定上LGBTのバービーですとか、あるいはさまざまな民族衣装を着た赤ちゃんの人形、それから真ん中にあるクレヨンがピープルカラーズと書いてありますが、これは全部肌色なんです。肌の色を集めた。これだけ多様性があるということを幼少期から身をもって体験をする。こうした日常に触れるものの中にダイバーシティという視点が入ってくるということが、刷り込みっぽいですが、重要なものではなかなというふうに思っています。もちろん学校の道徳教育等の中から、移民についてのドキュメンタリーですとか、ハーフというタイトルが見えていますが、そうしたものを見ることも有効かと思えます。

こうした地道な取り組みが功を奏するんじゃないかということと、あと、1個皆さんに体験していただきたいんですが、こうしたクイズなんかもロールプレイ的なものも重要なかなと思います。

クイズです。(タガログ語のスライドを投影。その後、イラストを追加)

答えが分かった方、いらっしゃいますか。皆さんそうだろうと…。もしよろしければ。

○浅野委員 17です。

○田中氏 ありがとうございます。おっしゃるとおりです。12足す5は7と。全然違いますよね。これだけだと全くわからないものが数字が入ってきて、ビジュアルが入ってきて、ぱっと捉えることができる。でも海外ルーツの子供たちは、結構このくらいの状態で授業を受けていることが多いんです。これが毎日続いたら、かなりしんどくないですか。言葉の壁さえ乗り越えればわかることが、一瞬にしてわからなくなってしまうというのが海外ルーツの子供たちの置かれている状況です。こうした体験を積み重ねていくことで、子供たちが持つ想像力、より鍛えられていくんじゃないかなというふうに思っています。

ちなみに絵がこうなったら全然違いますよね。ビジュアルも意外と重要で、こうしたところをできれば学校の先生方にもぜひ身に着けていただけたらと思います。加えて、先ほど「やさしい日本語」にも出ていました。私はボイストラは推しアプリで、まだやはり現実的には使えない部分も多いんですが、皆さんが使い込んでいくことで成長するんです。なので、やはり積極的に使っていったり、地名や名詞なんかをどんどんインプットして、訂正機能がついているので、自分で訂正することができるんです。そうやって学習を進めていかないと賢くならない。こういったものを私たち自身で育てていくということも大事なかなと思います。

「やさしい日本語」の考え方で、共生社会の新しいコミュニケーションのあり方、ポケトークの使い方なんかも含めて、子供たちに必要な新しい力として、この外側に想像力が土台としてあるということですよ。必要かなというふうに思っています。

これもそうですよね、「やさしい日本語」というのはどういうものというのを感覚的につかむときに、この英文の意味がぱっとつかめる人は余り多くないと思うんですけども、こうなったらわかりやすいですよ。これ上と下、同じ意味合いのことを言っているんです。「if you have any questions, please call」、なんか質問があったら電話してと。多分こういうのを見るとぱっとつかめませんか。こういう工夫をいろんな場所で行っていくと、すごく想像力が働くんじゃないかなと思っています。

さらに最後に一つ、共生社会のあり方、異なる人々同士のかかわり方として、私がつモデルになるんじゃないかなと思っている動画を御紹介します。お願いします。

これは「what would you do?」という、あなたならどうするというアメリカ版モニターリングみたいなどつきり番組なんです。社会派どつきり番組から御紹介をする動画です。

(動画再生)

○田中氏 すみません、このあたりでとめていただけたらと思います。これはユーチューブに載っていますので、「what would you do?」あなたならどうする、というふうに検索を入れていただくと、今御覧いただいた動画だけでなく、ムスリムの店員さんバージョンですとか、東南アジア系女性のネイリストバージョンですとか、いろんなバージョンが御覧いただけます。登場した人たちは仕掛け人のいじわるを言う人と、ヒスパニックのスペイン語を話すお母さんに、英語をしゃべる娘さんだけが仕掛け人で、それ以外の方々は一般の方なんですよね。私が共生社会というふうに聞くときに、どこを目指すのかというステップを考えたとき、まず第一ポイントは今のあの状態かなといつも思うんです。要するに、誰かが嫌なことを言っても、必ず誰かが助けてくれるという状態です。アメリカは私も1年弱くらい住んでいたんですけど、そういう社会なんですよね。正義を持っている人がいる。それは迷わずにアクションを起こせる人たちが本当にたくさんいて、嫌な思いをするたびに、大丈夫、気にしなくていいよとかというふうに、今見ていただいた動画のとおり守ってくれる人がいるんですよね。

LGBTQにおけるアライ(A l l y)の取り組みも同じようなところがあると思いますが、全員が全員共生社会に対して理解を示すというのはかなり困難だろうと思います。一方で、より多くの方が前向きに捉える、さらに自分事として捉え、アクションを起こせる、というような状態は、少なくともつくっていきけるんじゃないかなと思う。私も都内の小学校に通う子供が二人いますが、自分の子供にもそういった力を身に付けてほしい。そうやってマイノリティや、いろんな人たちとともに暮らしていく社会というのをお互いに支え合っていくというような力をこれから先を生きる子供たちに、ぜひ身に付けてほしいなというふうに思っています。

今は余りにも海外ルーツの子供たちを取り巻く日常の中にそういうアライ(A l l y)のような存在が少ないんです。やはり皆さんが物おじしてしまって声が掛けられない、お祭りなんかにも少し遠巻きに海外ルーツの子供たちがのぞいていたりしても、やはりおいでよという一言がかけられないとか、一緒にやろうよというようなことが言えない

という、心の壁が非常に大きいなというふうに思います。なので、「やさしい日本語」やポケットーク、何でもいいんですが、そういったものを活用しながらでも、どんどんトークを、心の壁を取り払って、お互いが一歩ずつ前進して歩み寄っていけるような地点に早く到達してくれるといいなというふうに思っています。

長くなりましたが、私からのお話は以上です。御清聴ありがとうございます。

○東京都生活文化局長 田中様、どうもありがとうございました。大変具体的な事例を交えて詳しい御説明をありがとうございました。

今いただいたお話に関しまして、何か御質問などございますでしょうか。

それでは、今いただいたお話だけではなく、きょうの議題全般に関して意見交換させていただければと思いますが、何かきょうの議論を通じましてお気づきの点や感想などでも構いませんので、御発言のある方いらっしゃったら、ぜひお願いいたします。

○浅野委員 ボーイスカウト東京連盟の浅野と申します。私の友人に、ボーイスカウトのリーダーをやっている愛知県にいる友人が聴覚障害なんですね。海外のいろんなところの聴覚障害の仲間と一緒にUDトークとか、それからスマイリングル、これも全部アプリでとれますので、こういうことを使えば何かポケットークをわざわざ買わなくても、すぐ使えるなどは思っております。

○東京都生活文化局長 ありがとうございます。ほかはいかがでしょうか。

○浅野委員 ごめんなさい。もう一つ。アドボカシーのことをここに少し載せてありますが、アドボケイドや、アドボカシーのこともいろいろ勉強したいなどは思っているんです、今。だから、こういう場でもそういうお話をしていただけたらと思います。

○東京都生活文化局長 ほかはいかがでしょうか。

○内藤委員 民生児童委員の内藤と言います。お世話になります。きょうはどうもいろんなことを聞かせていただいたんですが、私は今国分寺なんですが、こういう外国の人たちとのかかわりというのは、国分寺でも昨年から子育て世代包括支援センターの事業を立ち上げたんですが、この中に一切そういうのはないですね。もう外国との子供たちの支援のあり方というのが、こういう包括支援の事業には一切入っていません。一切言葉も出てこない。今回初めてこういうテーブルに着いて、こういうお話を聞かせていただいたんですが、行政が現場に対して、我々は地域福祉の扱う民生委員ですが、こういう

話が一切ないんです。現場として。だから情報がおくれているというか、行政がもっとこういう情報を流してくれないと、我々は一步も前に進まないということです。

きょう初めて会議に出させていただいてわかったんですが、そういう子供たちがこれから成長するというのは、人間というのはどこでも移動するじゃないですか。だから、どこにも存在するわけですよ。それに対して対応が全然行政と民生委員と、いろんな係もそうですが、日本人に対してしか今まではきていないんで、外国人、ダイバーシティなんていう、そういう考え方を行政側も意識を持たないと、こういうのはすごい手おくれになってしまいます。孤立する子供たちも出てくるんじゃないかと思う。

ですから、こういうのをやはりもっと輪を広げるんでしょうけど、やはり何が言いたいかというと行政です。これがもっともっと深く立ち会っていかないと、難しいんじゃないかなと思います。

子供たちは待っていないんですから、やはり子供たちとのもっとかかわりを一緒にするとか、スポーツとか音楽とかで、会話できなくてもスポーツで参加できて、サッカーなんかするとすごいなじみやすいじゃないですか。共通する課題が多くて。音楽も自国の歌を歌うとみんないいと言って、楽しむ。だから、そういうところから入っていくような世代で、我々もかかわればわかりやすいんですが、会話というのはなかなか難しいんで、やっぱり文化も違うし、生活習慣も違うんで。そういう壁もあるし、一概には言えないんですが。

最初に言ったとおり、行政のほうからもう少し支援というか、こういうことをしていただかないと、これから大変な時代に来ているんじゃないかと思います。以上です。よろしくお願いします。

○東京都生活文化局長 ありがとうございます。じゃあ、お願いいたします。

○中原委員 ケースワーカーさんが一緒に外国人の方の家庭を訪問してあげて、親御さんの内情を把握してほしいんです。子供たちは小学校ですと、遊びの中から言語を、日本語をどんどん覚えていくんです。ただ、親が全然、それは生活のために働いていれば、勉強しろというのはなかなか難しいので。ですから、ケースワーカーとか、言語支援者、また東京都のほうからの支援を拡充して行ってあげないと、取り残されるというか、先ほど出てきたような差別、いじめ、親に対して。親はルールをわかりませんから、ごみ

捨て一つにしても勝手に捨ててしまう。ですが、この日は何と種類が違っても全部入れちゃうと、今度は近隣とのもめごとにつながっていく。かといって、これからは外国人の就労者、または国籍を持っていくというのはどんどんふえてくる傾向にあると思うんです。

ですから、そこら辺のところをもう少し支援していく。うちは八王子なんですけど、20以上大学があって、大学の中で外国から来ている人もたくさんいるので、そういう方たちとの何ていうんですか、共同作業で、英語なら英語、中国語、韓国語、スペイン語とか、そういうところにカリキュラムを組んで両方で支援をしていく。また、そんな形をとっていくのに、学校には校長会がありますから、発信することは非常に簡単なんです。ですから、それをまとめていけば、つながっていくんじゃないかなと私は思っているんです。

学校運営協議会のメンバーでもありますので、絶対差別とかいじめ、また外国人に対する目線の差別ですね。言葉ではなく。そういうのを何とか取り締まっていこうということで、みんなで育てていこうという機運でやっていますので、まずは親御さんがやはりこっちを向いてくれないと、なかなかとんちんかんですと、子供だけがかわいそうになってしまいますのでね。

あと、これから小学校がたしか70時間、年間の英語教育が入ってくるのに、英語の先生が足りないと思うんです。それだけ増やしてもいいんですが。では、現実各学校がついていけるのかと。うちのほうでは中学校が38、小学校が70あって、全体で108の学校があるんですが、そういう形の中にカリキュラムで組んでいったときの英語対応が果たしてできるのかなというふうに、今は疑問を持っていますので、東京都のほうから支援をしていただいて、各学校にやはり先生を派遣していただくということが重要な課題に、まず育てるよりもそこから先かなというふうに思っていますので、よろしく願いします。

あと、もう1点、おくれてきて申しわけなかったんですが、先ほど村田さんからおっしゃられた災害時の対応を子供たち、親たちにどう伝えていくか、これが一番大きな問題だと思います。いつ来るかわからない災害ですが、地道にやっておく必要が必ずあると思いますので、よろしく願いします。すみません。

○東京都生活文化局長 ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。

きょうは青少年の多文化共生の心を育むということで、「やさしい日本語」についての御説明と、それから田中様からの御講演をいただきました。今、この場は青少年健全育成推進会議ということで、青少年に対して外国人、なんというか、顔だちや肌の色だけではなくて、さまざまな文化だとか、日本人同士でもいろいろ違いがあるのも当たり前を受けとめられる子供たちを育てていくというのを今教育という話もありました、行政という厳しいお声もいただきましたけれども、行政の中でも教育の分野であるとか、地域での活動の支援であるとか、さまざまな形で協力をしていかななくてはいけないと思いますし、いろいろ現場を抱えて活動していただいている団体の皆様にも御協力をいただきながら行政としても、より一層連携をとって頑張っていかななくてはいけないなというのを改めて私も痛感をしたところでございます。

これは先ほど田中様の話にもありましたが、外国籍、外国にルーツを持つお子さんの問題だけでなく、今後LGBTとか、日本人同士でもいろんな人たちがいるんだというのがみんな当たり前を受けとめられるように、大人も子供もなっていくのを多分目指していかないと、みんなが生きやすい社会にならないんだと思うので、いろんな方向から連携がとれるように行政の内部でも頑張っていきたいと思いますし、引き続き関係の団体の皆様にもお知恵を拝借しながら、御協力をいただきながら進めてまいりたいと思います。

きょうはおかげさまで貴重なお話をいただいて、皆様からもいろいろ御意見もいただきまして、ありがとうございます。予定の時間より若干前ですけれども、よろしければきょうはこれで予定の議題も終了いたしましたので閉じたいと思いますが、よろしいでしょうか。

では、最後に事務局から何かありますか。特にないですか。

では、本日はこれで終了させていただきます。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、まことにありがとうございました。

午後 3 時 20 分閉会